

母語話者が非母語話者の日本語レベルに応じて行う意識的配慮・言語的調整の分析

ー接触経験が多い母語話者1名に着目してー

張瀟尹(一橋大学大学院生)

1. はじめに

接触場面において、母語話者には非母語話者の言語能力に応じた適切な言語調整が求められる(筒井 2010)。これまで、母語話者が非母語話者に対して行う調整に関する研究がなされてきたが、非母語話者の言語能力に応じた具体的な調整の仕方については、十分に明らかになっていない。また、非母語話者に合わせて母語話者自身の言語使用を調整する場合、単に言語的調整だけではなく、意識的配慮も行われている(一二三 1995)。日本語教育の知識や教授経験を持つ母語話者日本語教師は、非母語話者の中間言語の発達を注意深く観察しながら、相手の日本語レベルに応じて意識的配慮、言語的調整を行うことができる(西原 1999)が、日本語教育の知識や教授経験を持たない母語話者はどうだろうか。そこで、本研究では、それらの母語話者のうち、接触経験が多い母語話者に着目し、彼らが非母語話者の日本語の習熟度に応じてどのような意識的配慮を行い、その意識的配慮がどのような言語的調整となって表れているかを分析する。

2. 先行研究と本研究の位置付け

これまで、接触場面において母語話者が非母語話者に対して行う意識的配慮の研究(一二三 1995 など)、言語的調整の研究(柳田 2015 など)がなされてきたが、非母語話者の日本語レベルに応じた具体的な調整の仕方については、十分に明らかになっていない。さらに、これまでの研究は、意識的配慮と言語的調整を別々に分析したものが多く、会話参加者である母語話者の会話時の意識的配慮と具体的な言語的調整の相関について分析するものは少ないため、詳細に分析する必要がある。そこで、本研究では非母語話者の日本語レベルの違いを認識している接触経験が多い母語話者1名(nsE1)に着目し、nsE1が日本語レベルが異なる非母語話者と会話する際に、どのような意識的配慮を行っているか、そして、実際の会話において意識的配慮がどのような言語的調整となって表れているかを明らかにすることを目的とする。

3. 調査概要及び分析方法

3.1 調査対象者と調査実施方法

本研究の調査対象者は普段から非母語話者との接触機会が多い20代の日本人女性(nsE1)である。nsE1と会話を行った非母語話者は調査実施前に行ったACTFL-OPIの判定結果に従って選定された初級(nnsN1)、中級(nnsI1)、上級(nnsA1)学習者各1名(20代、女性、中国人日本語学習者)である。調査では、nsE1にこれから会話する相手の日本語レベルを伝えずに3名の非母語話者と1回ずつ会話をさせた。会話の内容は10分程度の雑談(自己紹介とコロナ禍の自粛期間の過ごし方)、及び20分程度の「目的がある会話」(一泊二日の旅行計画)である。毎回の会話の直後に、相手に対する印象や会話時に行った配慮などを感想シートに記入してもらい、3回目の会話の直後に、「会話の満足度」、非母語話者の「印象の良さ」、「日本語レベル」という3つの観点からそれぞれに1位から3位までの順位を付与してもらい、その理由を記述してもらった。その後、フォローアップ・インタビュー(以下:FUI)を実施した。FUIでは会話の映像を見ながら、会話時の感想などを確認し、感想シートに書かれた内容が会話のどの部分を指しているかを特定してもらった。

また、nsE1が判断した3人の会話相手の日本語レベルの順位と、OPIテストの判定結果と一致している。つまり、nsE1は自分と会話した3人の非母語話者の日本語レベルの違いを認識している。

3.2 分析データと分析方法

本研究の分析対象は①FUIの文字化資料、②感想シート、③nsE1と非母語話者3名による会話データ¹である。意識的配慮の分析にあたっては、「会話時にどのような意識的配慮を行ったか」に焦点を当て、佐藤(2008)の質的データ分析法

¹ 収集した3回の会話データを宇佐美(2019)『基本的な文字化の原則(BTSJ)2019年改訂版』に従って文字化した。

を援用し、データ①、②を分析する。一方、意識的配慮はどのような言語的調整となって表れているかの分析にあたっては、nsE1がFUIで特定してもらった「意識的配慮を行った」箇所をデータ③から抽出し、データ①、②を参照しながら、総合的に分析する。

4. 分析結果

4.1 nsE1が初級、中級、上級学習者に対して行う意識的配慮

本項では、nsE1が行った意識的配慮の抽出結果を示す。データ①、②を分析した結果、[相手の日本語レベルを探る]、[話すスピードを調整する]、[会話をリードする]などの13のコードが抽出された。さらに、内容の類似性からコード間の関係性を検討し、〈相手の知識や反応を探る〉、〈話し方を調整する〉、〈聴き方を調整する〉、〈会話進行に配慮する〉、〈話題選択に配慮する〉の5つのサブカテゴリへと集約し、最終的に【相手の理解を促進する配慮】、【相手が話しやすい環境を作る配慮】の2つのカテゴリが生成された。表1に意識的配慮の抽出結果、及びnsE1の言及状況をまとめて示す。

表1 nsE1が行った意識的配慮

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	対 nnsN1	対 nnsI1	対 nnsA1
相手の理解を促進する配慮	相手の知識や反応を探る	相手の日本語レベルを探る	●	●	●
		相手の持つ背景知識を探る		●	●
		相手の反応を観察する	●		
		相手の理解レベルを推測する	●	●	●
	話し方を調整する	話すスピードを調整する	●	●	
		短く話す	●		
		視覚情報を提示する	●	●	●
		使用語彙を調整する	●	●	●
	聴き方を調整する	相手の発話を遮ぎらないように間をとる	●	●	
		不自然な表現を許容する	●		
相手が話しやすい環境を作る配慮	会話進行に配慮する	会話をリードする	●	●	●
		話題選択に配慮する	●		
	相手の知識に合わせた内容を話題にする	●	●	●	

表1に示したように、非母語話者の日本語レベルが上がるにつれて、言及されるコードが減少していく傾向がある。つまり、日本語レベルが高い非母語話者より、日本語レベルが低い非母語話者の方がより多くの意識的配慮に言及されている。そのうち、[相手の反応を観察する]、[短く話す]、[不自然な表現を許容する]、[相手の興味に合わせた内容を話題にする]は、nnsN1だけに言及された意識的配慮である。このことから、nsE1は日本語能力に制限のある非母語話者と会話する際に、相手の表情や反応をこまめに観察することを意識し、自身の発話の長さを短くするようにし、相手の発話に見られた誤用や不自然な表現に寛容に対応し、自ら発話することが少なく、自信を持って話せる話題も限られている非母語話者の気持ちを汲み取り、相手の興味関心のある話題を積極的に会話に取り入れるように意識していると言えよう。

一方、[相手の日本語レベルを探る]、[相手の理解レベルを推測する]、[視覚情報を提示する]、[使用語彙を調整する]、[会話をリードする]、[相手の知識に合わせた内容を話題にする]は、どのレベルの非母語話者に対しても言及された意識的配慮である。このことから、非母語話者の日本語の習熟度によらず、nsE1は相手がどの程度の日本語を話せるかを探りながら会話をし、自分の発話が相手にとって理解できるかどうかを推測し、相手の理解を助けるために文字や映像などの視覚情報を提示するようにし、言い換えや説明などを頻繁に行い、会話の進行をリードするようにし、非母語話者の知識量を配慮し、会話の流れから簡単に予想できるような内容を話題にするように配慮していたと言えよう。

特に、FUIでは、nsE1がどのように[使用語彙を調整する]ように心掛けたかに関する語りが非常に多く見られた。[使用語彙を調整する]に関する語りを確認したところ、4つの下位分類があることが観察され、その結果を表2にまとめる。

表2 【使用語彙を調整する】の下位分類

コード	下位分類	対 nnsN1	対 nnsI1	対 nnsA1
使用語彙を調整する	予め簡単な語を使う	●	●	
	理解困難が予想される言葉を予め言い換える・説明する	●		●
	相手が理解できなかった語を言い換える・説明する	●	●	
	語の理解確認をする	●		●

表2から分かるように、nnsN1に対して4つの下位分類が全て言及されている。それに対し、nnsI1に対しては{予め簡単な語を使う}、{相手が理解できなかった語を言い換える・説明する}が言及されており、nnsA1に対しては{理解困難が予想される言葉を予め言い換える・説明する}、{語の理解確認をする}が言及されている。このように、非母語話者の日

本語レベルによって、語彙を調整する際にとる言語的調整が異なるという傾向がうかがえた。この結果を踏まえ、次項では会話の断片を提示し、nsE1 が初級、中級、上級学習者にそれぞれどのように「使用語彙を調整」しているかを考察する。

4.2 nsE1 が初級、中級、上級学習者に対して行う言語的調整

4.2 では、nsE1 が FUI で特定した「使用語彙を調整」した箇所の会話を提示し、「使用語彙を調整する」に関する意識的配慮がそれぞれどのような言語的調整となって表れているかを分析する。

談話例 1 : nsE1- nnsN1

発話番号	話者	発話内容	関連する意識的配慮
44-2	nsE1	ストレスなので、そうです、だから、あの一、ネットショッピングで、香水 [↑]、あの一、いい匂いがするスプレー [指でスプレーをプッシュする動作をする]、香水とか、	理解困難が予想される言葉を予め言い換える・説明する
46	nnsN1	香水は、なんかよく分かりませんね。	
47	nsE1	えーっと、パフューム [↑]、(ううん)、perfume。	相手が理解できなかった語を言い換える・説明する
48	nnsN1	ううん [頭を左右に振る]。	
49-1	nsE1	あの一、何だろう、	
50	nnsN1	運動ですか、(スポーツですか) {<} [↑]。	
49-2	nsE1	[↑] (あの一) {>}、香水は名詞で [手で香水の容器の形、大きさを表す]、えーっと、こうシュッとやって [指でスプレーをプッシュする動作をする]、こうやって [両手首を摩擦し、鼻の前で匂いを嗅ぐ動作をする]、いい匂いする (ああ一) ものです。	相手が理解できなかった語を言い換える・説明する
51	nnsN1	ああ、分かりました。	
52	nsE1	分かります [↑]、そうそう、が、後、バスオイル、([↑] (あの一)、お風呂に入れる、入浴剤 [↑]、(うん [顔をしながら]) お風呂に入れて、いい匂いだなあって言って楽しむ、(うん、そうですね) もの買ったり、してます (笑い)。	語の理解確認をする/理解困難が予想される言葉を予め言い換える・説明する

nsE1 は、nnsN1 が自己紹介していた段階で、「彼女は (日本語で会話するのが) 自信がなさそうなのがすぐ分かった」ため、その後の会話では「なるべく簡単な言葉で話してはいたつもり、名詞が多かったりとか」と述べた。談話例 1 では、nsE1 が自粛期間中にネットショッピングで香水やバスオイルなどを購入したことについて語っている。44-2 行目で、nsE1 はまず「香水」を上昇イントネーションで発音し、その後すぐに、ジェスチャーを加えながら、「香水」を説明し始めた。しかし、46 行目で nnsN1 は不理解を示した。それに対し、nsE1 は 47 行目で「香水」を外来語の「パフューム」と英語の「perfume」で言い換えた。48 行目で nnsN1 は再度不理解を示し、49-2 行目で、nsE1 は「香水」の容器の形、つける時の動作、用途などから「香水」を説明した。説明を受けた nnsN1 は 51 行目で理解表明をした。その直後の 52 行目で、nsE1 は「香水」の理解確認をしてから、「バスオイル」を「入浴剤」に言い換え、「バスオイル」の用途、効果などを自ら説明した。このように、様々な言語的調整を行い、複数回の意味交渉を通し、nsE1 は nnsN1 に「香水」と「バスオイル」を説明した。44-2 行目と 52 行目では、nnsN1 から不理解表明や質問がないが、nsE1 は相手にとって理解しにくいかもしれないと考えられる言葉を予測し、自ら言い換えや説明を行った。また、47 行目、49-2 行目では、明確な不理解表明を受けた nsE1 は言い換えや説明を行った。さらに、52 行目で「香水」の理解確認をしてから、「バスオイル」の説明に移った。

談話例 2 : nsE1- nnsI1

発話番号	話者	発話内容	関連する意識的配慮
44	nnsI1	普通の、あの一、う、う、外で売っているケーキは、ふわふわ [→]、してるん (うん) ですが (うんうん)、私が作ったのは、ちょっと硬いです。	
45	nsE1	あっ、パサパサしてた？	
46	nnsI1	(笑い) パサパサでいいんですか [視線が左上を向いている]。	
47	nsE1	あの一、なんだろう [手を相手に見せる]、水分がなくて、(あっ、そうです)、水分がなくて、なんかクッキーみたいで (うん)、なんかし、しっとりって言うんですけどあの一、チョコレートとかのう、濃厚な (ああ) 感じがしっとりって言うんですけど、(お一、[點頭する]) それの逆で、水分がなくて、(笑い) なんか口の中の水分が全部持っていけるのをパサパサと言います。	相手が理解できなかった語を言い換える・説明する

一方、nnsI1 との会話のビデオを筆者と一緒に確認した際に、二人の自己紹介が終わった後、nsE1 は「2 番目の方もすごく日本語は上手だったけど、話すスピードだったり、相槌の仕方だったり、1 回目の方 (nnsA1) と比べて遅かったというのと、すごいニコニコ微笑んだから、多分理解できてない部分もあるのかなあと思った」ため、「ちょっとレベルを落とした方がいりかなあって思って」と述べた。談話例 2 の直前では、nnsI1 が自粛中に炊飯器でケーキを作ったことについて語っている。44 行目で、nnsI1 は外で売っているケーキの方がふわふわしているが、自分が作ったケーキの方が「ちょっと硬い」と述べた。nnsI1 の発話を聞いた nsE1 は 45 行目で「パサパサしてた？」と聞いた。46 行目で、nnsI1 は笑いながら nsE1 に「パサパサ」の意味を確認した。そこで、47 行目で nsE1 は「パサパサ」の意味を説明し始めた。nsE1 は皮膚が乾燥していることをジェスチャーで表したり、「クッキーはパサパサ、チョコレートはしっとり、濃厚」などの例を提示したりし、「パサパサ」の説明を行っていた。

談話例 3 : nsE1- nnsA1

発話番号	話者	発話内容	関連する意識的配慮
17	nnsA1	おー私もね、でも、い、今も全然なんか外に出られない状況ですか東京は。	
18	nsE1	あのね、東京は出られないじゃ、出てはいけないとはなんか言えないんだって法律で(はい)、だから自粛してくださいって(笑)、自粛って言う、(あー) あのーあまり出ないでねって言うけど、実は出たらちょっとあの一週りの目があるかなって感じ(笑)、だから私はなるべく出ないようにしています。	理解困難が予想される言葉を予め言い換える・説明する
19	nnsA1	ああそうですね、私も、あの一、その時も北京にいて、で、あんまり外へ出られない、出られなかったですね。	

談話例 4 : nsE1- nnsA1

発話番号	話者	発話内容	関連する意識的配慮
44	nsE1	車、あの一、なんかあの一富士山って、行き方があって私は下から登るんじゃないで五合目とかまで、(うん) 車でいきたい(笑)ながら。	
45-1	nnsA1	五合目から、	
46	nsE1	<五合目って分かります> < > 【?】。	語の理解確認をする

FUI の際に、nsE1 は、会話の最初は「ちょっと探り探り、どの程度の日本語話せるかなあ」と考えていたが、会話しているうちに、nnsA1 が「日本語は割とできるかなあと思ったから、普通に話してました」と述べた。談話例 3 では、二人が東京と北京のコロナ状況について会話している。17 行目で、nnsA1 が nsE1 に東京の状況を聞き、18 行目で、nsE1 は「自粛」の意味を自ら説明し始めた。しかし、nsE1 は「自粛」という語の辞書上の意味を説明するのではなく、コロナ禍という社会背景を加えた上で、「自粛」の意味を説明していた。FUI の際に、nsE1 は「このようなことは日本に住んでいない外国人にとっては難しい」と思ったため、説明したと述べた。一方、談話例 4 は、二人が旅行の目的地を富士山にすることを決定し、登山ルートについて話している断片である。44 行目で、nsE1 は五合目から登った方がいいことを提案し、46 行目で「五合目って分かります?」という理解確認を行った。なぜ理解確認を行ったかという筆者の質問に対して、「五合目」という登山の行程単位は「中国にはないだろうなあと思った」と述べた。このように、nnsA1 と会話する際に、nnsE1、nnsI1 と会話した際に多く行われた語自体の説明が少なく、日本に住んでいない外国人にとって理解しにくいかもしれないと考えられる社会状況に関する語や、外国人にとって馴染みにくく、日本特有の登山の行程単位について説明や理解確認を行っていたと言えよう。

5. まとめと今後の課題

以上の分析から、非母語話者の日本語レベルによらず、nsE1 はどのレベルの学習者に対しても、[相手の日本語レベルを探る]、[相手の理解レベルを推測する]、[視覚情報を提示する]、[使用語彙を調整する]、[会話をリードする]、[相手の知識に合わせた内容を話題にする]を意識的に配慮していたことが明らかになった。また、会話相手が初級学習者の場合、nsE1 は特に [相手の反応を観察する]、[短く話す]、[不自然な表現を許容する]、[相手の興味に合わせた内容を話題にする]を意識的に配慮していたことが分かった。さらに、非母語話者の日本語レベルによって、語彙を調整する際にとる言語的調整が異なるという傾向がうかがえた。会話相手が初級、中級学習者の場合、nsE1 は様々な意識的配慮を行い、語の説明や言い換え、理解確認を多く行っていた。一方、上級学習者の場合、nsE1 は語自体の意味説明ではなく、社会背景を踏まえた上で、外国人にとって馴染みにくい日本語特有の表現について説明や理解確認を行っていたことが分かった。今回は紙幅の関係で、[使用語彙を調整する] 配慮がどのような言語的調整となって表れているかだけを分析したが、今後は抽出されたほかの意識的配慮の分析も行いたい。さらに、接触経験が少ない母語話者、母語話者日本語教師と比較し、それぞれのグループが行う意識的配慮、言語的調整の特徴も明らかにする必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2019) .改訂版 : 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作 平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B (2) (研究代表者宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 佐藤郁哉 (2008) . 質的データ分析法—原理・方法・実践— 新曜社
- 筒井千絵 (2008) . フォリナー・トークの実際-非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違— 一橋大学留学生センター紀要, 11, 79-95.
- 西原玲子 (1999) . 日本語非母語話者とのコミュニケーション—日本語教師の話はなぜ通じるか— 日本語学, 18, 62-69.
- 一二三朋子 (1995) . 母国語話者と非母語話者との会話における母国語話者の意識的配慮の検討 教育心理学研究, 43, 40-49.
- 柳田直美 (2015) . 接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して— ココ出版